

インターセクショナルリティと分断

今年も、とうとう最終月がやってきました。

最近では、コロナ関連の行動制限がなくなり、感染予防対策をしながら自由に移動することが可能になりました。

中止されていたイベントも再開され、街はにぎわいを取り戻しているようですが、リモート授業や会議が定着するなどコロナ前の世界とはすっかり変わったという印象を受けます。みなさんはいかがでしょう？

コロナの感染拡大は、世界中の人々にふりかかりました。

地域、人種、ジェンダー、年齢、障害の有無などに関係なくです。

ただ、これらの属性の組み合わせの違いによって、

生活への影響は違ったものになっています。

仕事を失って生活が苦しくなった人もいれば、特に何も失わずに済んだ人もいます。

こうした属性の重なりに注目した概念に、

「インターセクショナルリティ」というのがあります。

インターセクショナルリティは、差別の複層性・交差性を考えるために、その「交差点」を生きてきた様々な当事者から生まれた概念です（藤高，2020）。

複層性・交差性のある差別とは、例えば、「ジェンダー」×「人種」など、複数の属性のかけ合わせで生じる差別を指します。

私たちは、つい、自分と異なる価値観を持っている人や行動様式を示す人に対し、拒否反応を示すことがあります。

また、ある人に対して違和感をもったことにより、その人全体を良くないものと決めつけて排除したり非難したりすることも往々にしてあります。SNS上ではある人の書き込んだ意見を集中的に他者が批判したり、誹謗中傷する「炎上」はその1つの例として考えられるでしょう。

しかし、私たちが認識できる他者は一部分にすぎず、他者のすべてではありません。

インターセクショナルリティという概念は、そうした事実を思い起こさせて、知らず知らずのうちに決めつけて行動することに対して立ち止まらせるものです。

ただ、私たちは、どう頑張っても他者のことを知りきることはできませんし、決めつけから完全に自由になることもできません。したがって、決めつけとその解除を繰り返しながら、心理的葛藤を抱え続けることが、取り返しのつかない分断を避ける方法になるのかもしれない。

もしかしたら、あなたの悩みは、インターセクショナルな視点で捉え直すことによって解決の糸口が見えてくるものかもしれません。悩んだときはいつでも総合相談室にご相談ください。

専任カウンセラー 井ノ崎敦子
令和4年12月1日発行

